

Title	都市を記憶するのは誰か：「歴史的環境保存の社会学」へ向けてのスケッチ
Sub Title	Who are those preservationists? : a preliminary consideration of memory, the city and the historic preservation
Author	堀川, 三郎(Horikawa, Saburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.117 (2007. 3) ,p.177- 218
JaLC DOI	
Abstract	John Ruskin once wrote: "We may live without her [architecture], and worship without her, but we cannot remember without her" (Ruskin, The Seven Lamps of Architecture, 1849, p.147). His writing provided reasoning for preservation of old buildings. More than a century and a half later, preservation movements such as the British and American National Trusts have become popular and are currently enjoying a moment of expansion. Why, then, has there been almost no sociological literature on the topic, even though sociology has traditionally paid very close attention to various kinds of social movements? Why has sociology been so silent about the people who try to remember the City? Tracing the history and development of preservation movements in industrial countries, and that of the U.S. in particular, this paper reports present issues in historic preservation and analyzes how preservation philosophy has evolved over time. In doing so, the author shows how an early prototype of preservation movement played a crucial role in discouraging sociology from dealing with the preservation issue, with the result that sociology has failed to convincingly portray who those preservationists are. Through a case study of a major preservation movement in Japan, the author claims that the movement was hardly monolithic and identifies at least four different types of participants within the preservation movement, giving a much clearer picture of the preservationists. The data used and reported here is based on fieldwork carried out by the author in the U.S. (2004-2006) and Japan (1984-2006).
Notes	特集記憶の社会学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000117-0177">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000117-0177</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

都市を記憶するのは誰か

——「歴史的環境保存の社会学」へ向けてのスケッチ——

堀 川 三 郎\*

**Who Are Those Preservationists?**

**——A Preliminary Consideration of Memory,  
the City and the Historic Preservation——**

*Saburo Horikawa*

John Ruskin once wrote: "We may live without her [architecture], and worship without her, but we cannot remember without her" (Ruskin, *The Seven Lamps of Architecture*, 1849, p.147). His writing provided reasoning for preservation of old buildings. More than a century and a half later, preservation movements such as the British and American National Trusts have become popular and are currently enjoying a moment of expansion. Why, then, has there been almost no sociological literature on the topic, even though sociology has traditionally paid very close attention to various kinds of social movements? Why has sociology been so silent about the people who try to remember the City?

Tracing the history and development of preservation movements in industrial countries, and that of the U.S. in particular, this paper reports present issues in historic preservation and analyzes how preservation philosophy has evolved over time. In doing so, the author shows how an early prototype of preservation movement played a crucial role in discouraging sociology

---

\* 法政大学社会学部

from dealing with the preservation issue, with the result that sociology has failed to convincingly portray who those preservationists are. Through a case study of a major preservation movement in Japan, the author claims that the movement was hardly monolithic and identifies at least four different types of participants within the preservation movement, giving a much clearer picture of the preservationists. The data used and reported here is based on fieldwork carried out by the author in the U.S. (2004–2006) and Japan (1984–2006).

## 1. 都市と記憶のポリティクス——本稿における問題

### 1.1 記憶の貯蔵庫としての建築

ゴシック建築を称賛し、建築と社会の在り方について積極的な発言を繰り返していたジョン・ラスキンは、かつて「われわれは建築がなくとも生活することができる。建築がなくとも礼拝することは可能だ。しかし、建築がなければ記憶することはできないのだ」(Ruskin, 1849→1877: 147)<sup>1</sup>と書いた。彼は別の著作で、建築物の「実用的使命は二つの分野、『実用』と『表現』に分かれる。『実用』は悪天候や戦争などの暴力から私達を防御するためであり、『表現』は事実を記録し感情を表現するための記念碑や墓などであり、歴史を明白に力強く伝えるための歴史書としての役割を果たす教会、寺院、公共建造物などである」(Ruskin, 1851–1853=2006: 482)とも書いていることから、ラスキンが建築を「歴史書としての役割を果たす」べきもの、いわば記憶の貯蔵庫としてとらえていた、と理解してよいだろう。

このような「記憶の貯蔵庫としての建築」というラスキンのテーゼは、われわれ社会学者にとっても、極めて興味深い。建築は確かに都市を構成する主要な要素のひとつであるし、記憶は社会学にとっても重要なテーマであるからだ。

しかし、社会学はいままでのところ、記憶が社会的に構成されていると

主張してきているにもかかわらず、十分にこのテーマについて語ってきていないと思われる。先行研究を振り返ってみるなら、例えば、モーリス・アルヴァックスの『集合的記憶』(Halbwachs, 1950→1968=1989)はすでにこの分野における古典的研究といってよいが、それは社会学的な「時間」研究であって、記憶、建築、社会の三者とその相互関係を十全に語ってはいない。建築学に分類されるものの社会学的な切り口を持ったケヴィン・リンチ『時間の中の都市』(Lynch, 1972=1974)においても、あるいはごく最近の集合的記憶に関する社会学的研究(Zerubavel, 2003)でも、建築やそれにまつわる集合的記憶について語ろうとする分析の焦点は、いずれも「時間」である。このこと自体、われわれの記憶というものが、時間と本質的に結びついた現象であることを指し示しているといえよう。

## 1.2 本稿における問い

だから、記憶と時間の本質的結びつきやその重要性については、疑念の余地はない。本稿がむしろ問題としたいのは、初発の「記憶の貯蔵庫としての建築」というテーゼのもつ、建築と社会の応答関係であり、現代都市における建築と記憶の位置付けだ。換言するなら、「“建築がなければ記憶することができない”というテーゼが該当するのは誰なのか」という問いである。

なぜ、このように問うのか。それは、都市と記憶とをめぐる現実の社会問題や社会運動を理解する上で、この問いが極めて重要であると筆者が考えているからだ。

敷衍するため、ここではひとつの言明を例に考えてみよう。「都市は常に変化している」——言ってしまうとただそれだけの、実にシンプルかつ「あたりまえ」の言明である。しかし、それは決して自明のことではない。

建物の建て替えや新築、住民の転入と転出が恒常的に行われている都市

は、毎日、異なった物理的実体として眼前にある。物理的にも人口量的にも、昨日と今日とでは決して同じではないはずだが、われわれはそれでも「同じ都市」として認識している。そこには一体、いかなるメカニズムがあるのだろうか。何を残せば同じ都市と感じ、何を壊してしまったらもはや同じ都市とは感じなくなるのだろうか。

補足するまでもなく、行政制度としては、同じ都市である。物理的な変化が一定程度あろうがなかろうが、東京都は東京都なのであって、それは変わることがない。むしろこの試みの問いのポイントは、行政区画といった制度を超えて作動する住民の都市認識プロセスが、一定の役割を果たしていることがこの問いから見えてくる、ということだ。「都市は常に変化している」にもかかわらず、われわれは同じ都市を生きっていると認識している。変化はなぜ、変化と認識されないのか。変化はコントロールされて、ある一定の範囲内に収まっているから変化として意識されないのだろうか。にも関わらず、われわれは「都市は常に変化している」という言明を、そのまま自明のこととして了解する。こうした意識の「振じれ」をもたらしているメカニズムとは一体どんなものなのだろうか。

こうした一連の問いを、ここでは、日本の都市の現実引き寄せて考えてみよう。例えば、住民にとって都市のある部分の改変がまったく問題にもされず当たり前のものとして見過ごされていく一方で、別のある部分の改変は、その都市のアイデンティティを決定的に変えてしまうので改変されるべきではないという強固な反対に出会う、という事態がある。先に述べたように、行政区画といった制度を超えて起動する住民の認識プロセスが、ここで重要な役割を果たしていることが見えてくるだろう（堀川、2003; 2004a）。

しかし、より重要な点は、新たな建造環境が必要であることを唱道し、常に都市を更新していくべきだとする人々がいる一方で、都市を記憶し、記憶の都市を残そうと努力する人々もいる、ということだ。「開発」と

「保存」という相反する主張は、お互いにぶつかり合い、妥協や協働、無視や撃退といった過程を経たひとつの結果として、今、われわれの眼前にある。目の前に広がる景観は、都市開発と記憶のポリティクスの産物なのだ。だからわれわれは、「都市は常に変化している」と簡単には言い表すことができないのだ。それは決して自明なことではなく、かえって、記憶を根拠に変化に抗う人々の存在を逆照射する。

したがって筆者は、本稿において、下記の一連の問いについて考えてみようと思う。すなわち、変化を否定し、変化する以前の都市を記憶する者とは誰なのか？都市を一定の形で残そうとする人たちの動き、これを保存運動と呼ぶことにするなら、一体、保存を唱える人たちとは、誰なのだろうか、と。

しかし、すでに述べたように、社会学は建築と記憶について十全に語ってきてはいない。いや、無視してきているといっても過言ではないほどである。これは一体どうしたことだろうか。ここでは、「ラスキンのテーゼは正しい/正しくない」という形ではなく、むしろ、どうして社会学は建築と記憶について語ってきていないのか、という形で考えたい。言い換えれば、「“記憶”について社会学者はどう語るのか」という主題を、「社会学はなぜ、“記憶”について語ってこなかったのか」という形に変換して論をすすめていく、ということだ。

次節以降では、変化に抗い、保存を主張する運動を取り上げ、その運動理念を読み解いていく。その上で、こうした運動がいかに社会学では語られてこなかったのかについて検討し、語られてこなかったがゆえに、保存を主張する個々の人々が誰なのかを社会学が解明し損ねていることを明らかにする。最後に、筆者の調査事例から「保存を主張する人々とは一体誰なのか」について試論的にスケッチしておくことにしよう。

## 2. トラストという保存戦略

### 2.1 保存を主張する運動とは何か

都市を記憶し、記憶の都市が改変されることに抗う人々の主張と動きは、保存運動と総称することが可能である。保存運動が対立する「敵手」は、都市の開発・再開発を進めようとする者たちであり、記憶の都市など一顧だにしない人々である。

前節では、やや議論を先取りする形で「都市を記憶する人々」と「保存」とを互換的に使用してきたが、それはこのような位置付けになっているからである。つまり、都市を記憶する者とは、「保存」という主張に集約することのできるような思想・営み・行動をもつ人々のことであり、したがって本稿は、保存をしようとする者とは一体誰なのかという形で問う、という論理構成をとっている。

こうした意味での保存運動は、産業化による国土の変化への反応として顕現した広範な社会運動であり、先進国にほぼ共通している。しかしながら、共通点はそれだけではない。急速に進行する産業化とそれに随伴する都市化によって激変する都市景観を憂い、変化する以前の景観を残そうとするとき、それが誰のものか、が問題の行く末をほぼ決定してしまう、という問題構成もほぼ共通であった。

土地所有の自由が認められている体制のもとでは、ある土地や建物の処分可能性は専らその所有者にある。所有者が現状の改変——例えば、古い家を取り壊してビルを建てる、といったこと——を行なうとき、非所有者にそれを止めることは難しい。なぜなら、所有権がない＝処分権がないからだ。共同体の規範が所有権に干渉しうる場合やその濃淡は一定程度あるとの主張もあるものの、依然として、所有/非所有の壁が、現状の保存/開発問題にとって決定的なものであることに変わりはない（堀川，2001）。

それなら、自ら買い取って所有権を後ろ盾にして保存しようという保存戦略が生まれてくる。変化に抗う人々の理想と信託を受けて購入・維持管理をする——これが、保存運動の一定部分を占める、トラスト(信託)という保存戦略の論理である(堀川, 2000a)。

トラスト運動の始祖は、イギリスのそれである。日本にも展開されているトラスト運動も、イギリスをその雛形としている。アメリカの運動展開は、イギリスとの連続性よりもその固有性が注目される。以下では、簡単ながら、その三国のトラスト運動の展開を概観してみよう。

## 2.2 信託による保存——ルーツとしてのイギリス

イギリスにおけるトラスト運動とは、1895年に設立された「ナショナル・トラスト」(the National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty; 「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」; 以下, NT と略記) であり、この種の運動の始祖である。NT は先ず自らを国民や地域住民から景観保護を信託された受託者と位置づけ、景観保護を願う国民との信託関係にもとづいて、NT が代わりに土地や建物を購入・所有し、維持・管理することによって景観保全を図るのが、トラスト運動の方法論である。そしてこの信託関係こそ、私的で勝手な土地購入と NT のそれとを区別するものだ。

イギリスで二度にわたる土地の「囲い込み」(enclosure) が起きていたことは、歴史の基礎的共通理解である。「囲い込み」の原因は、人口増にともない生産性の向上が要請されていた当時、新たな農業技術には不適合な開放耕地制(open-field system) を廃し、耕地を集中させて農業を大規模化していくことが必要であったからだと説明されるが、なかでも 18 世紀後半からの「第 2 次囲い込み」によって、多くの開放耕地・共有地が「囲い込」まれて消滅していった点が重要である。というのも、「第 2 次囲い込み」は、地主の請願を受けた議員立法による合法的囲い込みであっ



たからだ。1801年に制定された「一般囲い込み法」の制度的背景もあって、「囲い込み」は結果的に広範かつ急速に進行し、イングランドとウェールズの多くの開放耕地・共有地が囲い込まれていった。結果的に、慣習的に通行可能であった土地が通行不能となったり、共有地での資源利用が制限されていく。

変化に抗う動きはこうした流れのなかから生まれ出てきた。1865年、共有地の使用权や通行権を守ろうとする「共有地保存協会」が設立されたのがそれである。これは共有地保存運動のスタートではあったが、「一般囲い込み法」という法的後ろ盾を持った「囲い込み」には有効に対抗できなかった。合法的な「囲い込み」にストップをかけることはできなかったからである。さらに、保存運動には法人格がないので法律的には対抗力が著しく弱く、そもそも土地を取得することができない、という原理的限界をも持っていた。

土地・資産を自ら所有して保存することのできる仕組みと運動が模索され、1895年にようやく先のNTが設立されたのだった。そこで保全の対象とされていたものは自然景観のみならず、歴史的建造物や史跡も含まれていた。当初のNTは、会社法による非営利法人格を取得して土地の買い取りを進めていたが、1907年には「ナショナル・トラスト法」によって独自の法をもつトラストとなり、一旦入手した土地や建物を「譲渡不能」(inalienable)と宣言する権利を手にするにいたる（「ナショナル・トラスト法」第21条）。「譲渡不能」宣言のなされた物件は、極めて特殊な場合を除き、イギリス政府ですら手出しができない<sup>2</sup>。「譲渡不能」宣言は、したがって、永久保存宣言である。今日、NTは巨大な資産保有団体へと成長し、現在は各地に散在している地域毎の環境保全運動を全国レベルで位置づけていく情報センター、キャンペーン組織および基軸団体としての性格を強めてきている（西村、1997: 31-80；堀川、2000a；2001）。

以後、世界各地にトラスト運動が設立されていくことになるが、NTの「所有する」という戦略は、「守りたい」「保存したい」という対象そのものを買い取って、その所有権をもって保護してゆこうとするという意味で、教育・啓蒙活動を行う環境教育運動団体とは異なっている。また、議員に対するロビー活動によって景観保全を達成しようとする圧力団体的運動とも異なっていることに留意しておきたい。所有権を逆手にとった保存戦略こそ、NTの独自性であるからだ（堀川，2001）。

### 2.3 日本におけるトラスト運動の展開——土地所有戦略の可能性と隘路

では、日本の場合のトラスト運動はどうなっているだろうか。

概略的にとらえるなら、日本の各地で展開されていた町並み保存運動や自然環境保護運動の参画者らが、有効な運動戦略としてイギリスのNTの理念と実践を学ぶ中で、徐々に広まっていったと理解するのが妥当であろう。なかでも、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の裏山にある御谷を守ろうとした「鎌倉風致保存会」、和歌山県田辺市での天神崎の買い取りを進めた「天神崎の自然を大切に作る会」、北海道斜里郡斜里町の「100平方メートル運動」などが代表格である。1983年には、こうした40を超えるトラスト運動の連絡組織として「ナショナル・トラストを進める全国の会」が設立され、1992年には法人化されるにいたっている。保存対象や設立の経緯は異なるものの、いずれも自発的な市民が、場合によっては行政とも密接に協力しながら、土地等の買い取りによる環境保全を目指している点は共通である。

しかし、日本の場合は開発促進型の都市/土地政策や公共事業に依存した政治体制、高い地価や一貫した規制緩和策などによって、イギリスほどの成果を挙げてはいないどころか、保存は極めて後ろ向きな、開発と真向から対立するものとして見なされ、連戦連敗しているといっても過言ではない。土地の開発ポテンシャルが極めて高い状況は、対抗的な土地所有

のコストをも著しく高いものとしてしまう。「強い所有権」を逆手にとろうにも、高騰する地価が購入することを不可能にさせてしまう——筆者は、ここに現代日本における土地所有戦略の隘路を見出さざるをえない(堀川, 2001)。

こうした現状がかえって浮き彫りにするものは、地域社会における環境管理の主体は誰なのか、公共事業の「公共性」の根拠とは何か、といった諸点であろう。それはそのまま、「戦後民主主義」とは何であったのか、官僚の位置付けと政治責任、アカウンタビリティ、都市ガバナンスの問題でもあると思われる。

### 3. もうひとつのトラスト運動——アメリカにおける固有の展開

#### 3.1 連続と断絶——「新大陸」におけるトラスト運動

アメリカの歴史的環境保存運動は、上述のイギリスや日本とは異なった展開を示していて興味深い。もちろん、大枠で言うなら、イギリスとアメリカにおける保存運動はともに産業化への反応という意味で、その根は同一であり、急速な近代化を前にした愛国的運動、あるいは上流階級の保守的な運動の空間的表現として成立したのは同じであるといっていよい(Barthel, 1996)。これは、イギリスの NT から連続する部分であろう。

しかし、イギリスでは「囲い込み」による共有地の私有化への反応として、徹頭徹尾、民間人の運動として成立し、後になってイギリス議会で法律的庇護を受けることになったのに対し、アメリカでは、連邦政府の強力な肩入れによって、あるいは、連邦政府の外郭団体として成立してきている点が、決定的な相違である<sup>3</sup>。NGO としての長年の実績を国家が追認したイギリスのトラスト運動に対して、連邦政府の主導により成立したのがアメリカでの展開であった。したがって、思想的連続性があるとはいえ、大きな断絶もまたあるのだと言わねばならない。

19 世紀後半、アメリカ東海岸を中心に歴史的環境運動が徐々に拡がっ

てきたアメリカではあったが、イギリスに遅れることほぼ50年、1949年に成立した連邦法および「ナショナル・トラスト」(the National Trust for Historic Preservation; 「歴史保存のためのナショナル・トラスト」; 以下、NTHPと略記)が、アメリカにおけるこの種の運動のひとつのピークであることに疑いの余地はない。

成立したNTHPは、国立公園行政など内務省の保存行政を補完し、受け皿として機能することが期待されていた(Glass, 1990)。実際、そのように機能したわけだが、危機に瀕していた建造物・場所を自ら所有して保存するという運動戦略は、初期の段階で頓挫し、NTHPは全国の保存運動の情報センターとして、とりわけコンサルティングへと機能特化していくことになる。なぜなら、建造物を購入/寄贈されても、それらを維持・管理する経費を賄うことが困難であったからだ。以後、NTHPは経費を賄うことの可能な資産・資金等が併せて購入/寄贈される場合を除いて、自ら所有することはなくなっていく(Murtagh, 1997: 39-50)。この点もイギリスNTとの相違点である。

情報センターとコンサルティングに特化するという工夫で発展してきたNTHPではあったが、連邦からの補助金も、いつも潤沢に供給されていたわけではない<sup>4</sup>。したがってNTHPが1980年代以降、連邦補助金に大幅に依存する体質から脱却し、自ら開拓した民間資金・寄付・年次大会などの活動からの収益によって賄う独立体制へと移行することを余儀なくされていく(Moe and Wilkie, 1997)。住宅・庭園関係の雑誌社、ケーブルテレビ会社や歴史的様式の窓枠を複製して製造・販売する会社などとのタイアップ企画によって資金を調達したり、年次大会の運営の効率化によって収益を確保したりすることによって、連邦補助金の抜けた後を補充するようになってきたのだった。

こうしてようやく獲得された財政的な基盤をもとに、全米各地の保存問題に対して、いっそう、NTHPはナショナル・センターとして最新情報

の供給、ノウハウのコンサルテーションをすることに自らの活路を見出していく。その具体例のひとつが、大成功を収めていると評価されている「メイン・ストリート・プログラム」であろう (Glisson, 1984; Moe and Wilkie, 1997: 150-151; 安達・鈴木・中野, 2006)。

「メイン・ストリート・プログラム」は、衰退した地方都市の商店街活性化を専門とする再開発コンサルテーションであるといっている間違いない。当初は NTHP 首脳陣から懐疑的に見られ、試験的プログラムといったプライオリティの低い扱いにすぎなかったが、時を経ずして、建物保存と中心市街地の商店街の再活性化は密接に関連していることが理解されていく<sup>5</sup>。建物単体の保存を考えていても実現は難しく、地区の経済再生といった広い文脈に位置付け、地区のなかの建物保存という観点から対策を講じるべきことを NTHP は学んだのだった (Smith, 1995: 50r)。

こうして NTHP の正式プログラムのひとつとして「メイン・ストリート・プログラム」は位置付けられ、郊外に立地するショッピングモールに対抗しなければならなくなった地方都市の商店街に対して、保存的再開発手法のノウハウを伝授し推奨していくことになった。コンサルテーションの内実は、たとえば、都心における駐車場に対する考え方——「店のすぐそばに駐車場を用意しなければお客が来ない、だから駐車場が必要だ、そのためには古い中心市街を取り壊して、豊富な駐車場スペースを確保すべきだ」といった考え方——をデータで突き崩し、独自性と専門性を持った個店の高度集積地としての都心、職住接近、歩行可能な範囲にすべてがある利点などをベースにした、保存的再開発計画を当該自治体に薦め、その原案作成を支援することなどが、このプログラムの名で行われている。

### 3.2 「センチュリー・ビル取り壊し問題」の波紋——変貌するアメリカのトラスト運動

こうした NTHP の変遷は、保存理念や戦略の深化によってのみもたら

されたわけではない。「メイン・ストリート・プログラム」から NTHP は地区全体としての保存ともいうべき保存理念を掴み取ったわけだが、同時にそれは「保存は開発の桎梏になるのではないか」「保存で食べていけるのか」という、当時 NTHP に投げ掛けられていた批判への解答のひとつでもあった。いわば、高邁な保存理念だけではなく、具体的かつ実現可能な経済手法として保存が有効であることを市場を通じて示さねばならない、でなければ連邦補助金なき後の NTHP は存続していけない、という厳しい状況への解答としてもたらされたものでもあった、ということなのだ<sup>6</sup>。

こうした変化のひとつの帰結が、NTHP 史上初めて、歴史的建造物の取り壊しを NTHP 自身が認めた「センチュリー・ビル取り壊し問題」(ミズーリ州セントルイス市)である (National Trust for Historic Preservation, 2005; Toft, 2005)。

この「センチュリー・ビル取り壊し問題」とは、ミズーリ州セントルイス市中心部の再開発プロジェクトの中で起きた、歴史的建造物の保存問題であり、合衆国の保存対象として登録されている「旧郵便局舎」(Old Post Office) を再開発するにあたって、隣接する、やはり歴史的建造物である「センチュリー・ビル」(the Century Building) を取り壊すべきかどうか争点となっていた。「旧郵便局舎」は 1872-1884 年にかけて建設されたフランス第二帝政様式建築で、この種のものとしては現存する 2 棟のうちのひとつという歴史的価値の高い建物であった。もう一方の「センチュリー・ビル」は、1896 年に建設された新古典様式建築で、大理石 10 階建の堂々とした歴史的建造物であった。

問題の歴史的背景は、1960 年代にまで遡る。ここでは紙幅の関係で詳述できないが、ポイントとしては、セントルイス市中心部の最盛期に建設された多くの歴史的建造物が、その後の衰退のなかで使われることもなく朽ち果てていったこと、それを再開発しようとする動きが数次にわたって

あったが、いずれも結実することなく、当該地域はいわば遺棄され続けてきた、ということだ。建物の大部分を取り壊しての大規模再開発の計画も持ち上がっては消えていった。1980年代以降、保存的開発という手法が都心部再生に有効であることが意識され始めた後は、「旧郵便局舎」の再利用が積極的に試みられてきた。実際、1982年に行われた修復・保存的開発は、当初こそフードコート部分（飲食店入居フロア部分）が成功したものの全体としては失敗に終わり、結局、目標とした近隣地区の活性化も達成されなかった。1997年、連邦政府(US General Services Administration)はついに「旧郵便局舎」の維持を断念し、除籍リストに掲載、売却方針を固めるにいたった。その理由は、あまりにも優雅な帝政様式の建築であるがゆえに商業的活用が困難な装飾的・象徴的空間が多く、賃貸可能床面積は総床面積の53.7%に過ぎない点があげられる。この数字は、通常の採算ラインといわれる80-85%を大幅に下回っており、到底、修復投資に見合った収入（売り上げ）が得られない、つまり借り手がつかないことを意味していた。

思うように売却できぬまま迎えた2001年以降、新たなデベロッパーの登場もあって、徐々に新たな再開発計画が動き出す。最終的にまとまった計画は、「旧郵便局舎」を保存的再開発してテナントを入れ、隣接する「センチュリー・ビル」を取り壊してテナント用の大規模駐車場ビルを建設する、というものであった(National Trust for Historic Preservation, 2005)。合衆国の保存対象として登録されている——いわば保存の殿堂入りしている貴重な歴史的建造物であるという——2棟のうち、一方を残すために、もう一方を犠牲にすることが、このプランの本質であった。

当該プランに関与した主体は多種多様であったが、最も中心的な役割を果たしたのは、「セントルイスランドマーク協会」(Landmarks Association of St. Louis, Inc.)とNTHPである。前者があくまで2棟一体の保

存的再開発を進めるべきで、「センチュリー・ビル」の取り壊し反対を唱えていたのに対し、後者は、地区再活性化の起爆剤としてこの再開発計画は不可欠であり、計画を頓挫させないためには、相対的に貴重な「旧郵便局舎」を保存し、「センチュリー・ビル」がその「犠牲」となって取り壊されることもやむを得ないと主張し、激しく対立していくことになった。前者は計画合意のための会議から退席して、計画への反対を明確に打ち出したが (Toft, 2005), NTHP 側は、途中退席は何も生み出しはしないとの姿勢を崩さなかった。結局、複数の訴訟が提訴され、2005年3月31日には『ニューヨーク・タイムス』紙も大きく報じるにいたったこの「センチュリー・ビル取り壊し問題」は、NTHPの主張通りに計画が進み、2005年11月までに取り壊しが完了し、「センチュリー・ビル」は姿を消した。現在は新たな大規模駐車場ビルが建設中である。

この問題の含意は「大規模駐車場建設を含んだ保存的再開発手法が、都市計画思想として適切であったのか」という都市計画・保存計画論的側面と、「保存を唱道する中核的運動団体である NTHP は、取り壊しを認めるべきであったか否か」という保存の戦略論的側面との、ふたつがあったように思われる。

前者の都市計画・保存計画論的側面では、都市内部の公共交通の整備によって歩いて暮らせるコンパクトな都心地区をつくることが主流となり、車依存社会からの脱却を目指すアメリカ都市計画思想の今日的位相からすると、この再開発案は車中心の発想に基づいた 1960 年代的なものであったとの批判がなされている。

本稿にとって重要なのは、いうまでもなく後者の保存の戦略論的側面であるが、それは保存の思想的側面といってもよいかもしれない。この問題は NTHP 会員内に非常に大きな論争と懷疑をもたらし、2005 年秋にオレゴン州ポートランド市で開催された NTHP 年次大会では、常に話題の中心を構成していた。それを端的に示していたのが、大会後半に特別に設



都市を記憶するのは誰か

定されたセッション「保存的再開発——取り壊しはいつ認められるのか？」での、下記の質疑応答であろうと思われる<sup>7</sup>。「セントルイスランドマーク協会」会長と NTHP 会長とが出席して対話するという異例のセッションの最後、フロアから一般会員の発言が相次ぎ、サンフランシスコで保存計画に従事するプランナーの A 氏が発言に立った：

Mr. A.: セントルイスの「センチュリー・ビル」について少しは聞いていましたが、そのお、〔今日のセッションで出てきたような〕詳細はよく知りませんでした。〔保存側と取り壊し承認側〕双方の言い分を聞いても、私としては、率直に言って、今日の NTHP 首脳陣側の説明には十分納得はできないと言わざるをえません。納得できない理由は、えー…。

司会: あの、〔時間がありませんので〕まとめて言ってくださいますか？

Mr. A.: えー、はい、わかりました。保存運動の総本山である NTHP が、重要な歴史的建造物の取り壊しを主張していたら、一体、世間にどう説明するのですか?! 〔フロアから、賛意の拍手多数あり〕（2005 年 9 月 30 日、オレゴン州ポートランド市内で開催された全米町並保存会議における筆者のメモおよび録音による。また、〔〕内の補足と和訳も筆者によるもの）

こうした質疑に対する NTHP 会長のディック・モー氏の「説明」は、基本的には 2 点あった。第一に、すでに保存は建物単体の保存を言う時代ではなく街区単位で考えなければならず、衰退し治安が悪化しつつある近隣に立地している「旧郵便局舎」を再活性化の触媒にするためには、今

回はやむを得ぬ処置であった、というものである。第二に、途中で「退席」したとしても、結局、両方とも保存できなかったらうから、対話を継続することによって少なくとも一棟は保存に成功し、より良いデザインを採用させるなどの積極的な役割が果たせた、というものであった。モー会長の「説明」が、全体的に受身・防衛的なものに終始していた感は拭えない。

ここで問題となるのは、こうした会長の「説明」の仕方自体が、保存的再開発手法が経済的にペイする実現可能かつ有効な手法なのだと証明してみせねばならない強力な圧力下にある NTHP が引き受けざるを得ない、組織的変容を指し示している点であろう。保存が保守的である、あるいは経済を無視した理想主義と批判され、経済界から総攻撃を受けてきた NTHP は、地域経済の再活性化の有力な一手法としての保存を是が非でも成功させねばならなかった。「保存」が経済資源になりうることを徹底的にマーケット・メカニズムの中で示していくという、極めてアメリカ的な保存のあり方の極北で、「保存運動の総本山」である NTHP が、歴史的建造物の「取り壊し」を主張する逆説——連邦補助金なき後も成功し続けなければならない NTHP がたどり着くべくして辿りついた地点が、この「センチュリー・ビル」事件であったのだ。アメリカにおけるトラスト運動の変容が、この事例を通してくっきりと浮かび上がってくるように思われる。

#### 4. 保存はどのように語られてこなかったか

##### 4.1 社会史としてのトラスト——イギリスにおける状況

では、保存運動について、社会学はどのように分析し、どのように保存について語ってきたのだろうか。後述するように、先行研究の少なさを考えれば、この問いは「保存はどのように語られてこなかったのか」とする方が適切である。以下、保存問題をめぐる研究動向について、ごく簡単に

概観してこう。

ルーツとしてのイギリスでの運動展開の歴史的研究については、それなりの蓄積がある。たとえば、1994年にNTが100周年を迎え際には、トラスト運動の歴史の新たな発掘と総括、そしてこれからの展望が活発に行われた(Jenkins and James, 1994; Waterson and Wyndham, 1994; Weideger, 1994; Newby, ed., 1995, Hunter, ed., 1995)。また、イギリスの海岸線を買上げる壮大なプロジェクトであり、会員の大衆化で大きな役割を果たした「ネプチューン計画」についてのPye-Smith (1990)、カントリーハウスを訪れる旅行者の心性・嗜好性を軸に、イギリスにおける観光のまなざしと観光行動の社会史を綴ったTinniswood ([1989] 1998)といった労作も1990年代に入って刊行されている。

しかし、こうした一連の業績は社会史領域に大きく偏っており、イギリス左翼政党の展開と保存運動との齟齬について論じているもの(Merri-man, 1991; Ward, 1998)や、保存政策についての研究(Delafons, 1997)、環境運動とその政治についての分析(Lowe and Goyder, 1983)があるのみで、管見では、社会学者によるものは、NTから100周年記念出版事業の一環として編集を委託されたNewby, ed. (1995)のみである。結論的にいって、社会学はイギリスの保存運動については、ほとんど語ってきていないといわざるをえない。

#### 4.2 暗黙の前提としてのイギリス——NTへの日本のまなざし

では、日本では、どのように語られてきたのだろうか。ここでも、イギリスの場合と同様に、「どのように語られてこなかったのか」と問いつつ、現状を概観するよりほかはないのが実状だ。

日本の町並み保存運動の仰ぎ見る手本として、NTは人口に膾炙しているわりには、文献は少ない。主なものとしては、大佛次郎(村上編, 1996)、木原啓吉(1982; 1984)、西村幸夫(1988; 1997; 2004)、原実

(1989), 藤田治彦 (1994), 向井清史 (1995), 磯田尚子 (1997), 水野祥子 (1998), 堀川三郎 (2000a; 2001) がある。

濃淡や強弱の差こそあれ、いずれも、イギリス NT を始祖とみなし、それに学びながら展開されてきた日本の運動、という図式を暗黙に共有しているように思われる。たとえば、Fedden (1974) を邦訳した四元忠博と木原啓吉との間でなされた NT および日本でのトラスト運動の性格規定や定義をめぐる論争は、潜在的には、イギリス NT の「正しい」理解をめぐる正統性争いであった。この論争も、カノンとしての NT、それを正しく理解しようとする邦語文献という図式から無縁であるとは思われない。

アメリカ NTHP に関する日本での文献事情も、その量という意味ではさして変わらない。矢作弘 (1989), 西村幸夫 (1993a; 1994; 1997) 以外には、目ぼしいものは見当たらないからだ。そして、この NTHP に関する文献が乏しいという事態は、あたかも「“本家” イギリスの NTこそ語られるべきものだ」という暗黙の合意が存在するかのような印象さえ惹起する。

#### 4.3 「奇妙な欠落」? ——アメリカ論壇における保存問題

では、アメリカにおける NTHP 研究についてはどうだろうか。結論を先取りして言えば、これについては「奇妙な欠落」があるように思われる。後掲の文献リストにもあるように、一定数の文献が存在していることは事実だが、運動の成功とは裏腹に NTHP やトラスト運動全般に関する包括的な歴史書はほとんど存在せず、各地域で展開した個別の保存運動に関するものがあるだけである（たとえば、Miller, 1984; Fisher, 1996 など）。NTHP 自体も自らの歴史を書き残すことに異常なほどに淡泊であり、Hosmer (1965; 1981), Finley (1965), Mulloy (1976) がわずかに見出されるのみである。「メイン・ストリート・プログラム」や、1974 年

以降の NTHP の歴史にいたっては、Moe and Wilkie (1997) を除けば、ほとんど語られていない。

では、社会学者は、アメリカの NTHP や歴史的環境問題にどのように取り組んできたのだろうか。管見では、文献は極めて少ない。先に述べた「奇妙な欠落」とは、これを指している。わずかに挙示しうる先行研究は、H. Gans の古典的評論 (Gans, 1968) を除けば、Weinberg (1979), Barthel (1989; 1996; 2001), そして Nolan and Buckman (1998) である。社会学者は、一貫してこの問題を避けているようにさえ、見受けられる。

だが、多くの論者が述べるように、アメリカの NTHP や保存運動は、大きな成功を収めてきた。「歴史的環境保存は、土地利用の改革運動のなかで、最も広範で長期間持続したもののひとつ」(Page and Mason, eds., 2004: 9) であり、「アメリカ人の生活にとって、すでに重要な一側面になった」(King, Hickman and Berg, 1977: ix)。そうであるがゆえに、「今日のアメリカ人は、過去から連綿と続く建造環境が持つ、共有された価値を当たり前なものだと見なしている」(Holleran, 1998: 3) ほどである、という。アメリカの保存運動は、だから「現在、アメリカ文化のなかで、空前の繁栄を誇っている」(Otero-Pailos, 2004: 8) のだ。

空前の支持拡大の時代を謳歌しているにもかかわらず、保存をめぐる社会学的分析はほとんど存在しない。例えば、バーセルは「〔普通、社会学者は、保存運動について〕都市におけるジェントリフィケーションかコミュニティ組織といったテーマとの関連で、ごく短く触れるだけである」(Barthel, 1989: 87; 〔〕内の補足は引用者) と述べ、保存運動が社会的な研究対象にほとんどなっていないとしている。運動として成功し広範に目に付くということが、必ずしも社会学的分析対象になることを意味しない。

だとするならば、そこに社会学の背後仮説としての要因を読み取ること

が可能なはずである。多種多様な社会運動を積極的に拾い上げて調査・分析してきたアメリカ社会学が、なぜ、アメリカ社会のなかで一定の地歩を占める保存運動を取り上げないのか。多くの都市の再開発でジェントリフィケーションが問題化されているにもかかわらず、保存問題やその運動について、アメリカ社会学が沈黙するのはなぜなのか。

#### 4.4 なぜ、語られてこなかったのか——ひとつの試論

なぜ、かくも保存は語られてこなかったのかという上の問いにここで試論的に解答するならば、下記の6点が、その要因としてあげられるように思われる。

まず第一に、保存運動の出自が「アメリカ上流階級」<sup>8</sup>であり、一般的には「金持ちの風変わりなホビー」といったレベルで保存運動はとらえられていたことがあげられるだろう。NTHPのみならず、「ニューイングランド古物保存協会」(略称 SPNEA)などの保存運動も、圧倒的に白人富裕層の運動であり、彼らの家柄や威信といった正統性を保証する建造物や場所を保存するという機能がなかったわけではなかったし、ジョージ・ワシントン終焉の地であるマウント・ヴァーノンの保存に関わったアン・パメラ・カニングガム女史(Ann Pamela Cunningham)とその「同志」である女性たちも、いわばボランティアとして保存のために活動し、募金を集めることのできる社会経済的な位置を持っていたことに注意したい(Dubrow and Goodman, eds., 2003)。また、降ってわいた開発計画のために、仕方なく地域の保存運動に関与していかざるをえなかったある市民は、当初持っていた「保存運動」へのイメージを、たとえば「歴史的環境保存を、あなたは“系図調べや骨董収集の類いのような、金持ちの未亡人がやる風変わりな趣味のうちのひとつ”と考えてはいないだろうか？私もかつてはそうだった。自分の祖先をどこまで遡って辿れるかを話すのが好きな輩が、きっと古い建物にも興味を持つのだろうと考えていた。だから

私のような、祖父母が東欧から三等船室に乗ってきたような移民の子にはまったく関係のない話だと考えていた」(Robin, 1990: 225)と語っている。「金持ちの未亡人がやる風変わりな趣味のうちのひとつ」としての保存——保存運動が「持てる」階層の運動であったこと、すなわち「強者の運動」になっていたことが、社会学を遠ざけさせるひとつの原因であると思われる。

第二に、保存がジェントリフィケーションを招来したことをあげることができる。前述のように、富裕層がある地区の保存を訴えて活動をし、それを実現することによって、当該地区のみならず周辺地域の地価も上昇していく。それはダイレクトに貧困層を直撃し、彼らを地区外へと追い出してしまう(Bures, 2001)。スラム化する都市中心地区をどのように再生するかという政策課題とともに、いかに貧困問題を解決するかという難題をも背負う自治体にとって、ジェントリフィケーションを結果する保存は、政策ニーズに逆行し、都市政治にとっては票田とはならなかった。深刻な経済格差の解消と社会的差別の廃絶、機会の平等の実現を目指さねばならないアメリカの政策トレンドに逆行する運動を、差別問題に極めてセンシティブなアメリカ社会学——実際にそうであるかどうか、というより、理念的にそうあらねばならない——は時代遅れの烙印を押し、静かに無視する道を選んだのではないか。

また、上述とも関連して保存運動は人種差別という視点を十分に受け止めてこなかったことが、第三の要因としてあげられよう。そもそも、18世紀から19世紀にかけての白人たちの教会を保存するというとき、はたしてそこに、教会創建はるか以前の先住民の建造物が視野に入っていたのか。あるいは、アメリカ大統領・トマス・ジェファソンの自邸であったモンティチェロの保存の際、ジェファソンの居宅部分だけを修復・保存するのか、彼のもとにいた多くの黒人奴隷の居住部分はどうするのか(Thomas Jefferson Memorial Foundation, 1997; Nolan and Buck-

man, 1998; Leepson, 2001→2003). このように問うと、アメリカ保存運動の WASP 的限界が見えてくるだろう。もちろん、バーセルも指摘するように、今日の NTHP は、その構成員も保存対象も極めて多様になってきているため、アメリカ保存運動の草創期には当てはまっても、今日では、必ずしもこうした論点がそのままストレートに了解される状況にあるわけではない。NTHP は、1960 年代後半以降、多様性と公開性、包括性を重視してきている (Barthel, 1996: 1-34).

第四に、アメリカの保存運動の頂点に立つ NTHP が高度に制度化されていて、不可視であったことが指摘される。NTHP 成立の経緯からもわかるように、内務省や国立公園局との密接な連携のもと、NTHP は保存行政に現場や民間のニーズを伝える役割が極めて大きかった。別言すれば、NTHP は運動ではあっても、行政という制度との距離が極めて小さく、限りなく制度と一体化して見えていたのではないか、ということである。制度の布置連関を睨みながらも、非制度的なもの——それこそ、社会的なもの——に着目する社会学から見れば、NTHP は不可視の位置にあったように思われる。

第五番目の要因としては、保存という事象の専門性確立のため、理論的、歴史的な批判的検討を放擲し、保存運動がある種の閉鎖的サークル化してしまったことがあげられるように思われる。たとえば、建築史家・ホルヘ・オテロ＝パイロス<sup>1)</sup>は、その刺激的な問題提起の論文で、NTHP の歴史と分析の欠落について下記のように述べている。すなわち、アメリカにおける歴史的環境保存は過去に例を見ないほどの大成功を収め、一般大衆にも支持されるにいたっている。しかしその成功は、専門領域として自立するために、内部では「保存とは何か」といった理論的、歴史的な批判的検討を放擲するという大きな代償をも伴っていた。結果的に、歴史的保存界はそうした自己検証に対する反感・憎悪を助長してしまった。歴史的環境保存を理論的、批判的に検証することを通じて、歴史的環境保存とい



う学問を前進させることが今こそ必要な時はない、と (Otero-Pailos, 2004). 建築史領域から、アメリカにおける歴史的環境保存の成功の代償の大きさを冷静に指摘している点で注目されるが、ここでの論点は、建築の専門的分野としてのアイデンティティの確立が、社会科学的分析を遠ざけさせたということだ。

六番目、つまり最後に指摘しておきたい要因は、保存運動そのものの歴史が神格化・伝説化され、学問的对象になりにくかったことをあげておこう。いうまでもなく、これは上の第五要因と密接な関連がある。つまり、専門性確立のために内部での科学的検討を放擲することは、その領域自体の歴史もまた、歴史学的検討対象から外されることをも結果したのだ。その意味で、ページとメイソンの手になる『歴史的環境保存にも歴史を』(Page and Mason, eds., 2004) という研究は、こうした保存運動史の欠落を埋めようとする貴重なものとして注目される。彼らは、アメリカの保存運動そのものについての歴史の欠落が、特定の先行研究によって描かれた保存運動の歴史記述を神話化してしまい、多様な運動展開が見失われているのではないかと問題提起している。興味深いことに、「奇妙な欠落」は、社会学のみならず、建築史学においても妥当するのだ<sup>9</sup>。ページとメイソンが批判するのは、チャールズ・ホスマー・ジュニアによって書かれた歴史である (Hosmer, 1965; 1981)。そこで繰り返し語られて「神話」になった2つのエピソードとは、1853年、先に触れたマウント・ヴァーノンを救おうとして成功したカニンガム女史の英雄的活躍と、1963年、ニューヨークのペンシルバニア駅舎の保存に失敗したことが後の保存運動の起爆剤になっていった、というものだ。こうしたエピソードは、保存という運動が“公共の利益を考えた意識の高い人々の果てしない努力である”と語りかけてくる。ページらが批判するのは、英雄的な個人・運動体に焦点をあて、その勝ち取った成果を中心に構成された「ホスマー流アメリカ保存運動史観」が、歴史的環境保存運動を形作ってきた大きな社会

的・文化的変容を見過ごさせてしまう、と考えるからだ (Page and Mason, eds., 2004:6-9). 同書は, Otero-Pailos (2004) と同様, アメリカにおける保存運動自体を, 時代の風潮や自明の価値から引き剥がして歴史的考察の対象とし, 冷静に分析すべきだと説いていることが際立った特徴である. Page and Mason, eds. (2004) と Otero-Pailos (2004) の二書を併せて読むと, リフレクシヴな批判的検討抜きに歴史的環境保存という領域の前進はありえないとする, その酷似した主張とその同時代性に注目せざるをえない.

こうした建築史学にける保存運動研究のニューウェーブと同様のものは, アメリカ社会学には起こっていないのだろうか.

私見では, 極めて散発的ではあるが, 起こる気配を見せているように思われる. たとえば, 米英のトラスト運動の比較を軸に「保存すること」の社会的側面を考察しようとした本格的な研究である Barthel (1989; 1996), アメリカ保存運動の運動理念分析の嚆矢とでも言うべき Nolan and Buckman (1998), イギリス NT の保存哲学の変遷を組織経営資料, とりわけ入手した資産台帳と会員層分析から描き出した労作 Cintron (2000), 東西ドイツ統一におけるベルリンの都市改造と保存問題を記憶という視点で読み解いた Jordan (2000; 2006) がそれだ. それらはアメリカ大陸のあちらこちらで相互に無関係に生みだされたものであるが, そこに主張の類似性・共通点を見出すことは困難ではない. だが, それはまだ, 相互に十分結びつくこともなく, ひとつの動きを形成するにはいたっていない微々たるものだ<sup>10</sup>.

以上みてきたように, アメリカ NTHP の組織的変質, 保存運動史の欠如, そしてそれを埋めてゆこうとする胎動——この三つの動きが指し示すものは, 大きく変貌するアメリカの保存運動の姿であり, アメリカ社会学の新たな一傾向である. そして, ここでの最も重要な論点は, こうした「奇妙な欠落」が, 「誰が保存運動を担っているのか=誰が都市を記憶する

のか」という問いをも不可能にさせてきた、ということだ。次節では、足早にはあるが、「誰が都市を記憶するのか」という問いの解き方を試論的に考えてみたい。

## 5. “Preservationists”とは誰か——都市を記憶しようとする人々

### 5.1 どのように都市を記憶しようとする人々について語るのか

「誰が都市を記憶するのか」という問いの解き方を考える上で重要な点として、筆者は、「関係主義的アプローチ」と「主体層としての把握」の二点があると考えている。

前者の「関係主義的アプローチ」は、「本質主義」(essentialism)と「構築主義」(constructionism)との対比のなかでとらえることによって、その重要性が理解できる。「本質主義対構築主義」という対比は、町並み保存論を語るうえでも、重要なのである。

保存について建築学は、建築固有の価値を本質主義的に語ろうとしてきた。価値は対象に内在し不変であるがゆえに、優れた建築的価値を持ったものは保存すべきである、ということになる。対象に内在するということは、その価値がその建築物の中に実在するという立場であり、したがって、その価値を見抜くことできる「専門家」として建築学がその価値を代弁し、その保存を唱える、という構造になっている。

それに対する「構築主義」は、価値は建築物には内在しておらず、むしろわれわれ人間の側が価値を構築することによって、建築自体に価値があるように見えるのだと主張する立場である。価値があると語るから価値がでるのだ、価値は社会的に構築されたものに過ぎない。だから、価値を分析することはわれわれの言説を分析することであるべきであって、専門家が価値を代弁するという構図を拒否する。これが構築主義者の立場だ。

しかし、筆者の試みている（そして、試みてきた）社会学的歴史的環境

保存論は、非本質主義的に、さりとて構築主義的にもならず、関係主義的に保存運動について語ろうというものであった。ある建物の価値は、住民とその建物との関係性によって決まってくるものである、という意味で、それは非本質主義的である。しかし、調査現場から感得されるのは、人々がある建物や場所の魅力や気配、迫力といったゲニウス・ロキを感じその価値を認めることと、保存運動の生成とは無関係ではないと思われるからだ。ある建物が保存対象に選ばれ、あるものはまったく顧みられずに取り壊されていく——構築主義的な立場では取りこぼされてしまう建物やわれわれの身体性（堀川，1999）が、保存運動の論理を読み解くうえで非常に重要なポイントなのではないかと考えざるをえない。

さらに、「主体層」として描くということも、方法的に重要である。保存運動と開発側、双方の動きを個人一人ひとりとして析出していく中から、それらをグループ、「層」として描き出す——こうすることによって、歴史的環境を重視する人が、個人的に懐古趣味をもっているからではなく、むしろ、都市づくりの思想という次元で問題をとらえていたこと、そして、保存/開発という対立が、既知の変数・属性（家・土地の所有/非所有、出身/流入、階層、学歴、政党支持、など）では十分に説明できないことを示しうるからだ。つまり、保存運動と開発推進派とを分けるのは、上述の諸変数と密接に絡みながらも、それだけには回収できない、空間認識の差（「場所」vs.「空間」）であったのではないと思われる（堀川，1998b；2000b）。

## 5.2 “Preservationists”とは誰か——ひとつの試論的類型論

筆者は、1984年以来、筆者は北海道小樽市において町並み保存運動の実証的研究を続け、(1) なぜ保存せよと主張するのか、その保存の論理の解明、(2) 保存運動に対して行政はどのような政策的対応をしたのかの解明、(3) 建築学的な定点観測手法に学び、争点となった景観の変容過程の

記録・分析、の3つの作業を行なってきた。紙幅の関係で事例についての説明は割愛せざるをえないが、筆者の長年の小樽研究とは「都市を都市たらしめるものとしての景観を保存すること」を対象とした環境共存の社会学的研究であり、住民による、公共空間への関与の正統性獲得運動の社会学的解明であったとまとめることができるだろう(堀川, 1994; 1998a; 1998b; 2004b; 2005; 2006a; 2006b; 堀川編, 2000; 2006)。

こうした一連の研究の手法上の特徴として、少なくとも下記の4点があったと思われる。

第一に、建造環境の実態とその産出メカニズムの峻別がある。これは、保存対象の二段階論ともいうべきもので、物理的な実態としての建造物そのものと、それが産み出されてきた制度的前提や社会規範、社会組織とを峻別し、なおかつ、両者をとらえていこうとすることである。町家を一例にあげるなら、京の町家の一定部分は、地場産業としての織物生産の在り方に密接に規定されて出来てきた建築様式であると考えられる。町家をそうした地場産業や社会規範と切断せずにとらえることが必要であろう。

第二の特徴は、場所/空間の区別、すなわち対象認識の二元論である。ある場所の保存をめぐる社会的な対立が生じたとき、どちらが正しいかではなく、なぜ、そのような対立が生じるにいたったかを問うべきである。このことに異存はないだろう。むしろ問題となるのは、小樽運河保存運動の事例が示すように、道路建設の必要性自体は、開発側と保存側の双方に認識されていたが、運河地区の扱いをめぐる、長年の対立が起きたということである。同じ運河を見ていても、道路推進派はそこを「道路建設に利用可能な未利用地」、すなわち無色透明な「空間」ととらえていた。一方の保存運動側は、同じ運河を自らのアイデンティティとの関係で語らねばならないような、意味の詰まった「場所」として把握していた。この「空間」/「場所」という「まなざしの相違」が、両者の主張や語りに齟齬をもたらし、対話は実質的に進展することなく、問題は終局を迎えてし

まった（堀川，1998a；1998b；堀川編，2006）。それぞれのアクターの対象に関する主観的意味規定をもとらえていくことは、必要である以上に、社会学的分析の一つの可能性である。

運動/行政の対抗図式を前提に、両者の「対抗的相補性」を積極的にとらえていこうとする点も、筆者の研究の特徴のひとつであった。二項対立の構図でとらえることは、問題をわかりやすくさせると同時に、硬直した党派的思考を呼び込みかねない。しかし、地域社会の現場は、依然として保存か開発かという二項対立の構図で顕現する。そうした対立が、どのような変化を産み出していくのか、にも目配りをしていくことがなお一層要請されるだろう。

第四の特徴は、特定の問題への継続的事例調査を行なっているという点だ。1984年から開始された小樽運河保存運動の調査研究は現在も継続中である。このようにある特定の問題を非常に長いスパンで把握してゆこうとすることは、問題の盛り上がり期のみ取材を集中させる一部のマスコミや研究者への暗黙の批判を内包している。改めて考えてみるまでもなく、ごく普通の市民にとっては住民運動といったものへの参画が決して「日常」ではないはずである。ならば、「非日常」としての運動高揚期だけ取材していてよいのか。いわば「戦時」としての運動高揚期だけではなく、「平時」としての日常とあわせてとらえてゆくべきであると筆者は考えているのだ。そのことによって、「戦時」の位置や意味もより明確に視ることができよう。

以上の諸特徴は、運動過程への着目＝保存を主張する人々の価値意識を探究するための必然的帰結であるとともに、問題・紛争を通じて、不可視の「環境共存」の動態をあぶり出すという戦略でもあった（堀川，2005；2006a）。

こうした分析を通じて、個々の所有物である建物が形作る景観が、一面では、人々の記憶を担保する公共的側面を持っていること、他面では、都

市景観自体が都市的経験そのものでもあること、が明らかになってきたように筆者には思われる。

では、保存運動に参加する人々とは一体誰なのか。従来の研究では、分析単位は保存運動体であった。運河保存運動の内部は一枚岩ではなかったが、堀川(1994; 1998a; 1998b)などの一連の研究では、運動の方針や戦略の変遷をトレースするために、あるいはその必要の限りで言及されていたに過ぎない。本節は筆者の小樽運河保存運動を例に、運動内部に異なるサブ・グループを発見し析出するための、ひとつのスケッチである。

そこで改めて小樽での運動を保存の論理によって分類すれば、少なくとも4つの異なるサブ・グループに別れていたように思われる(堀川, 2006a)。

第一のグループは「耽美派」である。彼らこそが運河保存運動を最初に持ち上げたわけだが、彼らは終始、現状の変更を一切認めない「凍結保存」を求めている。その保存の理由付けは“廃虚の美”とでもいうべきもので、崩れ行く運河の寂れた姿は、そのまま静かに保存されるべきだとした。ゆえに現実の政治過程からはもちろん、地域住民からの支持も得られず、したがって、保存運動内部でのヘゲモニーも掌握することはなかった。

第二のグループは、「左翼運動派」だ。彼らの発想および行動の際立った特徴は、運河保存問題を政府や官僚機構との「闘い」の一環と位置付けていたことである。裏をかえせば、運河保存に固有の意義を見出していたわけではなく、自らの反体制的スタンスを示しうる限りにおいて、個別具体的な問題に関与していたに過ぎない、ということだ。その時の「ホットな問題」が運河問題から米空母寄港問題や近隣地域の原発問題へとシフトしていくにつれ、彼らも保存運動を離れ、反寄港運動・反原発運動へと活動の場を移していったことが、その証左である。こうした事情に加えて、保守的な地域社会内での「アカ攻撃」の影響もあり、彼ら「左翼運動派」

は運動の中核を担うことができなかった。運河問題終盤期、保存運動内部の手續を飛び越えての単独市長リコール運動の旗揚げとその挫折は、彼らのヘゲモニー奪取のための行動であったととらえることができる。

第三のグループは、「純粹保存派」と名付けることにしよう。彼らは、可能なかぎり地方政治と経済問題から距離を取り、「小樽っ子」の運河への心情のみを語ることで、高齢者を中心に、常に一定の支持を集めていた。政治的無関心な運動スタンスは内外から批判にさらされてきたものの、その単純に保存しか語らぬ点が、保守層にも一定程度のアピールをしたと解釈してよいだろう。早世した初代「運河を守る会」会長の後を受けた二代目会長は、このグループの最も象徴的な存在であった。政治や経済を超越した位置からの一貫した発言は、多様な利害が錯綜する運動内部の受け皿として機能し、長期間にわたって運動を支えてきたように思われる。

第四は、「まちづくり派」と呼ばれる人々である。彼らは多くを「純粹保存派」と共有しながらも、保存の論理という点では異なっていた。つまり、保存を最終目的として純粹に求める「純粹保存派」とは違って、保存は地域社会の再活性化のための一手段と位置付けられていた。別言すれば、心情的には運河をそのまま保存したいが、地域で広範な支持を得て運河全面保存を勝ち取るためには、「保存的開発」ないし「観光開発」といった経済的展望をもった運動理念を提起しなければ、運動も運河も守れないとの冷徹な認識が背景にあった、ということである。

この4分類を用いることによって、運河保存運動の展開過程もよりクリアに見えてくるように思われる。すなわち、市民の支持を十分に得ることができなかった保存運動初期は、「耽美派」と「左翼運動派」によって担われており、陳情と街頭署名といった戦略しか展開できなかったのだ。一方、市民の広範な支持を得て運動が政治的交渉力を獲得するにいたった保存運動後期、運動のリーダーシップをとっていたのは、「純粹保存派」



と「まちづくり派」であった。「純粹保存派」が広範な市民純粹な郷土愛に訴えかけて支持を集め、さらに「まちづくり派」が戦略的まちづくり論の立場から「運河保存は再生への有力な一手段」と地元経済界に訴えて支持を取り付けていく——こうした二人三脚が、運動の最盛期をもたらしたのだが、ここで注目されるのは、「まちづくり派」の主張は一貫して保存ではあるが、その内実が異なっている点である。「純粹保存派」や「耽美派」にもつながる「凍結保存」から、一定程度の開発までは容認する、変化を住民主導でコントロールしようとする「保存的開発」へと変容してきていたということだ。同じ「保存」という言葉が使われているがゆえに分りづらいが、これは保存理念の大きな転回であった。

このように、保存運動を4つのサブ・グループに分類してみるとにより、運動を担った人々とその相互関係が、より明快に見えてきたように思われる。無論、各サブ・グループ内部をより詳細に解明し、くっきりとピントのあった「層」を描かねばなるまい。それは筆者の今後の課題としたいが、最後に改めて「保存を主張する人々とは誰なのか」と問うてみよう。

上の試論的分析から見てきたひとつの解は、保存ということばに依拠しながら、実は変化を自らの手でコントロールしようと願う人々であった、ということだ。言葉の指し示すところとは全く裏腹に、「保存」とは、“どのように「変化」させるか”を意味していた。「耽美派」と「左翼運動派」によって担われた運動初期から、「純粹保存派」と「まちづくり派」による運動後期にかけての「保存」の位置付けの転回がそれを示していた。保存とは変化することである。この逆説的表現の意味するところは何か。本稿の問いの一応の終着点は、都市と記憶をめぐる新たな問いの始発点でもある。

註

- 1 ここでの和訳は引用者によるものだが、高橋松川と杉山真紀子の達意な訳も参考にした。Ruskin (1849→1880=1930) および Ruskin (1849→1880=1997) を参照。
- 2 この「譲渡不能」宣言と強制収用権が衝突し、強制収用・開発が認められたケースがあるが、それは極めて例外的なものである。Fedden (1974=1984: 92-93), 木原 (1982: 69-73; 1984: 87-91), Murphy (1987=1992: 181) など を参照。なお、NTにおける「譲渡不能」宣言の制度的側面に関しては、西村 (1997: 42-42; 2004: 444-445) を参照。
- 3 このことは、アメリカにまったく民間の保存運動やイニシアチヴがなかったということを意味しない。Hosmer (1965; 1981), Finley (1965), Mulloy (1976), Page and Mason, eds. (2004) などが示すように、全米各地には多種多様な保存運動が19世紀後半から存在していた。ここでの論点は、アメリカの保存運動の中心かつ内務省との密接な協調関係をもった運動団体が政策的に必要とされ、ゆえに各界の主要人物の起用・協力関係のもと、政府関係の施設などを使用しながら設立された、という経過である。Finley (1965) を参照。
- 4 補助金の削減などは、カーター政権に始まり、レーガン政権まで続くこととなった。Murtagh (1997: 47-48) を参照。
- 5 2005年11月21日、マサチューセッツ州ケンブリッジ市内でのKennedy Smith女史へのインタビューによる。Smith女史は、元NTHP National Main Street Centerの所長であり、その在任期間は13年にわたる。
- 6 こうしたNTHPや保存への批判は、より広い文脈では、スマートグロースや成長管理といった都市計画的規制へ反対し、自由な不動産開発やその取引を保護すべきだという思潮と同根であるように思われる。反都市計画規制の思想とアメリカにおける具体的な経緯については、福川・矢作・岡部 (2005: 179ff.) を参照。また、スマートグロースについては、小泉・西浦編 (2003) がよい見取り図を提供してくれる。
- 7 これが「端的に示していた」ものであるならば、最も象徴的に物語る一件は、この2005年NTHP年次大会の開会式(Opening Plenary Session)での緊急動議であろう。開会式は極めて儀礼的・儀式的なもので、基調講演および事務局の用意した式次第にしたがって粛々と進行するのが常であるが、この日はフロアから、セントルイス市での「センチュリー・ビル取り壊し問題」について一般会員に詳しく経緯を説明せよとの緊急動議が出された。全く予定外で予想されていなかった動議に会場は騒然となった。このことは、「センチュリー・

ビル取り壊し問題」のインパクトを最も象徴的に物語っているように思われる。2005年9月28日、オレゴン州ポートランド市内での2005年NTHP年次大会における筆者の現場での参与観察ノートによる。

- 8 たとえば, Seale (1992) を参照。そこには, “由緒正しい” エスタブリッシュメントの広大で豪華な居宅と, それにまつわる郷愁や思い出が吐露されている。
- 9 このことは, アメリカ「社会学」にとっての歴史的環境問題の位置付けと, アメリカ「社会」での歴史的環境問題の位置付けという, ふたつのレベルでの検討が必要であり, かつ, 重要であることを示しているように思われるが, 本稿ではこの点を指摘するだけに留め, 別稿を期したい。
- 10 蛇足ながら, 2006年2月25日, 初めて Barthel, Cintron, そして筆者が一堂に会したボストンの「アメリカ東部社会学会第76回年次大会」(Eastern Sociological Society) 会場での熱気は, 散発的な動きでしかなかった胎動が, 少しずつ出会い, 成長していく予感があったからこそだと思われる。

## 文献

- 安達正範・鈴木俊治・中野みどり (2006)『中心市街地の再生: メインストリートプログラム』, 京都: 学芸出版社。
- Barthel, Diane (1989) “Historic Preservation: A Comparative Analysis.” *Sociological Forum* 4-1: 87-105.
- (1996) *Historic Preservation: Collective Memory and Historical Identity*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- Barthel-Bouchier, Diane (2001) “Authenticity and Identity: Theme-Parking the Amanas.” *International Sociology* 16-2: 221-239.
- Batinski, Michael (2004) *Pastkeepers in a Small Place: Five Centuries in Deerfield, Massachusetts*. Amherst, MA: University of Massachusetts Press.
- Boyer, M. Christine (1994) *The City of Collective Memory: Its Historical Imagery and Architectural Entertainments*. Cambridge, MA: MIT Press. → 1996 Paperback edition.
- Bures, Regina M. (2001) “Historic Preservation, Gentrification, and Tourism: The Transformation of Charleston, South Carolina.” Edited by Kevin Fox Gotham, *Critical Perspectives on Urban Redevelopment* (Research in Urban Sociology, Vol. 6): 195-209, New York, NY: JAI Press.
- Cintron, Leslie Gwen (2000) “Preserving National Culture: The National

- Trust and the Framing of British National Heritage, 1895–2000.”  
Unpublished Ph.D. dissertation, Harvard University (183pp).
- Collins, Richard C. (1980) “Changing Views on Historical Conservation in Cities.” *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 451: 86–97.
- Delafons, John (1997) *Politics and Preservation: A Policy History of the Built Heritage, 1882–1996* (Studies in History, Planning and the Environment 22). London, UK: E & FN Spon.
- Dubrow, Gail Lee, and Jennifer B. Goodman, eds. (2003) *Restoring Women’s History Through Historic Preservation*. Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press.
- Fedden, Robin (1974) *The National Trust: Past and Present*. London: Jonathan Cape.=1984 四元忠博訳『ナショナル・トラスト：その歴史と現状』, 時潮社.
- Finley, David E. (1965) *History of the National Trust for Historic Preservation, 1947–1963*. Washington, D.C.: National Trust for Historic Preservation.
- Fisher, Lewis F. (1996) *Saving San Antonio: The Precarious Preservation of a Heritage*. Lubbock, TX: Texas Tech University Press.
- Ford, Larry R. (2003) *America’s New Downtowns: Revitalization or Reinvention?* (Creating the North American Landscape). Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Fowler, Peter J. (1992) *The Past in Contemporary Society: Then, Now*. London: Routledge.
- 藤田治彦 (1994) 『ナショナル・トラストの国：イギリスの自然と文化』, 淡交社.
- 福川裕一・矢作弘・岡部明子 (2005) 『持続可能な都市：欧米の試みから何を学ぶか』, 岩波書店.
- Gans, Herbert J. (1968) *People and Plans: Essays on Urban Problems and Solutions*. New York, NY: Basic Books.
- Gaze, John (1988) *Figures in a Landscape: A History of the National Trust*. London: Barrie and Jenkins.
- Glass, James A. (1990) *The Beginnings of a New National Historic Preservation Program, 1957 to 1969*. Nashville, TN: American Association for State and Local History, and Washington, DC: National Conference of State Historic Preservation Officers.
- Glisson, Linda S. (1984) *Main Street: Open for Business*. Washington, D.C.: Na-

- tional Main Street Center, National Trust for Historic Preservation.
- Halbwachs, Maurice (1950) *La mémoire collective* (Bibliothèque de sociologie contemporaine). Paris: Presses Universitaires de France. → 1968 2<sup>e</sup> édition (revue et augmentée). = 1989 小関藤一郎訳『集合的記憶』, 京都: 行路社.
- 原実 (1989)『歴史的風土の保存:「鎌倉市民」の日々』(アカンサス建築叢書 2), 大田原: アカンサス建築工房.
- Hayden, Dolores (1995) *The Power of Place: Urban Landscapes as Public History*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Holleran, Michael (1998) *Boston's "Changeful Times": Origins of Preservation and Planning in America* (Creating the North American Landscape). Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press.
- 堀川三郎 (1994)「地域社会の再生としての町並み保存: 小樽市再開発地区をめぐる運動と行政の論理構築過程」, 社会運動論研究会編『社会運動の現代的位相』: 95-143, 成文堂.
- (1998a)「都市空間と生活者のまなざし」, 石川淳志・佐藤健二・山田一成編『見えないものを見る力: 社会調査という認識』: 133-149, 八千代出版.
- (1998b)「歴史的環境保存と地域再生: 町並み保存における『場所性』の争点化」, 船橋晴俊・飯島伸子編『環境』(講座社会学 12): 103-132, 東京大学出版会.
- (1999)「戦後日本の社会学的環境問題研究の軌跡: 環境社会学の制度化と今後の課題」『環境社会科学研究』5: 211-223.
- (2000a)「トラスト運動」, 地域社会学会編『キーワード地域社会学』: 318-319, ハーベスト社.
- (2000b)「運河保存と観光開発: 小樽における都市の思想」, 片桐新自編『歴史的環境の社会学』(シリーズ環境社会学 3): 107-129, 新曜社.
- (2001)「景観とナショナル・トラスト: 景観は所有できるか」, 鳥越皓之編『自然環境と環境文化』(講座環境社会学第3巻): 159-189, 有斐閣.
- (2003) "Why 'Place' Matters: The Possibilities of Sociological Research on Historic Preservation Movements from an International Perspective." Research proposal submitted to Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard University, September 19, 2003.
- (2004a)「景観保存と観光開発: 社会学の視点から」, 法政大学大学院エコ地域デザイン研究所編『エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン』: 40-41, 京都: 学芸出版社.

- (2004 b) “Why ‘Place’ Matters: Townscape Preservation Movements and Community Regeneration in Postwar Japan.” Paper read at “History 1851: Twentieth Century Japan,” Fall 2004, Faculty of Arts and Sciences, Harvard University, Cambridge, MA, December 9, 2004.
- (2005) 「都市生活と生活環境変動：ローカルな空間制御システム・再考」, 藤田弘夫・浦野正樹編『都市社会とリスク：豊かな生活をもとめて』（シリーズ社会学のアクチュアリティ：批判と創造 8）：173-204, 東信堂.
- (2006a) “‘It Wasn’t a Matter of Length’: Historic Preservation Movements in Japan.” Paper read at Department Colloquium (invitational), Department of Sociology, State University of New York at Stony Brook, Stony Brook, NY, January 31, 2006.
- (2006 b) “Place of Historic Preservation Movements in Sociology: A Case of Japanese Urban Sociology.” Paper read at the 76<sup>TH</sup> Annual Meeting of the Eastern Sociological Society (Regular Paper Session 235: Why Does Place Matter?), Boston, MA, February 26, 2006.
- 堀川三郎編 (2000) 『小樽市における歴史的環境保存と観光開発 (3): 1999 年度法政大学社会学部社会調査実習報告書』, 法政大学社会学部社会調査実習室 (A4 判, 367pp.).
- 堀川三郎編 (2006) 『都市再開発における景観保護問題の社会的実証研究』（科学研究費補助金基盤研究 C-2〔研究課題番号：13610236〕研究成果報告書）, 法政大学社会学部堀川三郎研究室.
- Hosmer, Charles B., Jr. (1965) *Presence of the Past: A History of the Preservation Movement in the United States Before Williamsburg*. New York, NY: Putnam’s Sons.
- (1981) *Preservation Comes of Age: From Williamsburg to the National Trust, 1926-1949* (2 Vols.). Charlottesville, VA: University Press of Virginia.
- Hunter, Michael, ed. (1996) *Preserving the Past: The Rise of Heritage in Modern Britain*. Gloucestershire, UK: Alan Sutton Publishing.
- 磯田尚子 (1997) 「ナショナルトラストの思想史的基盤：何を、なぜ、いかに保存するか」, 加藤一郎・野村好弘編『歴史的遺産の保護』：2-12, 信山社.
- Jenkins, Jennifer, and Patrick James (1994) *From Acorn to Oak Tree: The Growth of the National Trust, 1895-1994*. London: Macmillan.
- Jonas, Andrew E. G. and David Wilson, eds. (1999) *The Urban Growth Machine: Critical Perspectives Two Decades Later* (SUNY Series in Urban

- Public Policy). Albany, NY: State University of New York Press.
- Jordan, Jennifer Annabelle (2000) "Building Culture: Urban Change and Collective Memory in the New Berlin." Ph.D. dissertation, University of California, San Diego (325pp.).
- (2006) *Structures of Memory: Understanding Urban Change in Berlin and Beyond* (Cultural Memory in the Present). Stanford, CA: Stanford University Press.
- 片桐新自編『歴史的環境の社会学』（シリーズ環境社会学 3），新曜社。
- 木原啓吉（1982）『歴史的環境：保存と再生』（岩波新書黄版 216），岩波書店。
- （1984）『ナショナル・トラスト』（都市のジャーナリズム），三省堂。→ 1992『ナショナル・トラスト』（三省堂選書 168），三省堂。
- King, Thomas F., Patricia Parker Hickman, and Gary Berg (1977) *Anthropology in Historic Preservation: Caring for Culture's Clutter* (Studies in Archeology). New York, NY: Academic Press.
- 小泉秀樹・西浦定継編（2003）『スマートグロース：アメリカのサステイナブルな都市圏政策』，京都：学芸出版社。
- Leepson, Marc (2001) *Saving Monticello: The Levy Family's Epic Quest to Rescue the House That Jefferson Built*. New York, NY: Free Press.→2003 Charlottesville, VA: University of Virginia Press.
- Lowe, Philip, and Jane Goyder, (1983) *Environmental Groups in Politics* (the Resource Management Series 6). London: George Allen and Unwin.
- Lynch, Kevin (1960) *The Image of the City*. Cambridge, MA: MIT Press.
- （1972）*What Time Is This Place?* Cambridge, MA: MIT Press. = 1974 東京大学大谷研究室訳『時間の中の都市：内部の時間と外部の時間』，鹿島出版会。
- Merriman, Nick (1991) *Beyond the Glass Case: The Past, the Heritage and the Public in Britain*. Leicester, UK: Leicester University Press.
- Miller, Amy Bess (1984) *Hancock Shaker Village/The City of Peace: An Effort to Restore A Vision, 1960-1985*. Hancock, MA: Hancock Shaker Village.
- 水野祥子（1998）「世紀転換期イギリスの環境保護活動：ナショナル・トラスト創設をめぐる新たな展開」『西洋史学』191: 22-41.
- Moe, Richard, and Carter Wilkie (1997) *Changing Places: Rebuilding Community in the Age of Sprawl*. New York, NY: Henry Holt.
- 向井清史（1995）「参加と交流による地域資源の保全と創造：イギリスのナショナル・トラスト運動」，今村奈良臣・永田恵十郎編『地域資源の保全と創造：

景観をつくるとはどういうことか』(全集世界の食料・世界の農村9), 農山漁村文化協会.

Mulloy, Elizabeth D. (1976) *The History of the National Trust for Historic Preservation, 1963-1973*. Washington, D.C.: Preservation Press.

村上光彦編 (1996) 『人間と文明を考える-水の音』(大佛次郎エッセイ・セレクション2), 小学館.

Murphy, Graham (1987) *Founders of the National Trust*. London: Christopher Helm.=1992 四元忠博訳『ナショナル・トラストの誕生』, 緑風出版.

Murtagh, William J. (1997) *Keeping Time: The History and Theory of Preservation in America* (Rev. Ed.). New York, NY: John Wiley and Sons.

Myers, Phyllis, and Gordon Binder (1977) *Neighborhood Conservation: Lessons from Three Cities*. Washington, D.C.: The Conservation Foundation.

National Geographic (2001) *Saving America's Treasures: National Trust for Historic Preservation*. Washington, D.C.: National Geographic.

National Trust for Historic Preservation (2005) "Case Study of the U.S. Post Office and Century Building, St. Louis, Missouri (November 15, 2005)." Washington, D.C.: National Trust for Historic Preservation (63pp.+ Executive Summary [8pp.]).

National Trust for Historic Preservation and Colonial Williamsburg Foundation (1966) *Historic Preservation Today: Essays Presented to the Seminar on Preservation and Restoration, Williamsburg, Virginia, September 8-11, 1963*. Charlottesville, VA: University Press of Virginia.

Newby, Howard, ed. (1995) *The National Trust: The Next Hundred Years*. London: the National Trust.

西村幸夫 (1988) 「英国ナショナルトラストの道程と環境保全運動の展開(1)-(4)」『都市問題』79-9: 87-100; 79-10: 85-99; 79-11: 83-99; 79-12: 69-90.

—— (1993a) 「アメリカにおける歴史的環境保全の歩み」『環境と公害』23-1: 27-31.

—— (1993b) 『歴史を生かしたまちづくり: 英国シビック・デザイン運動から』, 古今書院.

—— (1994) 『アメリカの歴史的環境保全』(J-JEC 環境シリーズ), 実教出版.

—— (1997) 『環境保全と景観創造: これからの都市風景へ向けて』, 鹿島出版会.

—— (2004) 『都市保全計画: 歴史・文化・自然を活かしたまちづくり』, 東京大



学出版会.

西村幸夫・町並み研究会編 (2000)『都市の風景計画：欧米の景観コントロール手法と実際』, 京都：学芸出版社.

西村幸夫・大西隆・大垣真一郎・岸井隆幸・小出和郎編 (2003)『[都市工学講座] 都市を保全する』, 鹿島出版会.

Nolan, Jr., James L., and Ty F. Buckman (1998) "Preserving the Postmodern, Restoring the Past: The case of Monticello and Montpelier." *The Sociological Quarterly* 39(2): 253-269.

岡真理 (2000)『記憶/物語』(思考のフロンティア), 岩波書店.

Otero-Pailos, Jorge (2004) "Now is the *Future Anterior* for Advancing Historic Preservation Scholarship." *Future Anterior* 1-1: 8-10.

Page, Max, and Randall Mason, eds. (2004) *Giving Preservation a History: Histories of Historic Preservation in the United States*. New York, NY: Routledge.

Pevsner, Nikolaus (1969) *Ruskin and Viollet-le-Duc: Englishness and Frenchness in the Appreciation of Gothic Architecture*. London: Thames and Hudson.=1990 鈴木博之訳『ラスキンとヴィオレ・ル・デュク：ゴシック建築評価における英国性とフランス性』, 中央公論美術出版.

Pickering, Paul A., and Alex Tyrrell (2004) *Contested Sites: Commemoration, Memorial and Popular Politics in Nineteenth-century Britain* (Studies in Labour History). Aldershot, UK: Ashgate.

Pye-Smith, Charlie (1990) *In Search of Neptune: A Celebration of the National Trust's Coastline*. London: the National Trust.

Robin, Peggy (1990) *Saving the Neighborhood: You Can Fight Developers and Win!* Rockville, MD: Woodbine House.

Rothman, Hal (1989) *Preserving Different Pasts: The American National Monuments*. Urbana, IL: University of Illinois Press.

Ruskin, John (1849) *The Seven Lamps of Architecture*. London: Smith and Elder.→1877 New York, NY: John Wiley.

—— (1849) *The Seven Lamps of Architecture*. London: Smith and Elder.→1880 New Edition. Kent, England: George Allen.=1930 高橋松川訳『建築の七灯』(岩波文庫青 670-4), 岩波書店.

—— (1849) *The Seven Lamps of Architecture*. London: Smith and Elder.→1880 New Edition. Kent, England: George Allen.=1997 杉山真紀子訳『建築の七燈』, 鹿島出版会.

- (1851–1853) *The Stones of Venice* (3 vols.). London: Smith and Elder.  
 =2006 内藤史朗編訳『ヴェネツィアの石：建築・装飾とゴシック精神』,  
 京都：法蔵館（原書第1巻の一部と第2巻のほぼ全体を訳出したもの）。
- Schlichting, Kurt C. (2001) *Grand Central Terminal: Railroads, Engineering, and Architecture in New York City*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Seale, William (1992) *Of Houses & Time: Personal Histories of America's National Trust Properties*. New York, NY: Harry N. Abrams.
- Smith, Kennedy Lawson (1995) "Main Street at 15." *Historic Preservation Forum* Spring 1995: 49–64.
- Stillinger, Elizabeth (1992) *Historic Deerfield: A Portrait of Early America*. New York, NY: Dutton Studio Books.
- Thomas Jefferson Memorial Foundation (1997) *Monticello: A Guidebook*. Charlottesville, VA: Thomas Jefferson Memorial Foundation.
- Tinniswood, Adrian (1989) *A History of Country House Visiting: Five Centuries of Tourism and Taste*. Oxford and London: Basil Blackwell and the National Trust.
- (1998) *The Polite Tourist: A History of Country House Visiting*. London: the National Trust.
- Toft, Carolyn Hewes (2005) "Remarks for 2005 National Preservation Conference Session: Preservation-based Development: Is Demolition Ever Justified?" St. Louis, MO: Landmarks Association of St. Louis, Inc. (4 pp.)
- United States Conference of Mayors Special Committee on Historic Preservation (1999) *With Heritage So Rich: National Trust for Historic Preservation*. Washington, D.C.: Preservation Press.
- Ward, Paul (1998) *Red Flag and Union Jack: Englishness, Patriotism and the British Left, 1881–1924*. Suffolk, UK: The Royal Historical Society and the Boydell Press.
- Waterson, Merlin, and Samantha Wyndham (1994) *The National Trust: The First Hundred Years*. London: the National Trust and BBC Books.
- Weideger, Paula (1994) *Gilding the Acorn: Behind the Façade of the National Trust*. London: Simon and Schuster.
- Weinberg, Nathan G. (1979) *Preservation in American Towns and Cities*. Boulder, CO: Westview Press.

都市を記憶するのは誰か

- Williams, Norman Jr., Edmund H. Kellogg, and Frank B. Gilbert, eds. (1983) *Readings in Historic Preservation: Why? What? How?* Piscataway, NJ: the Center for Urban Policy Research, Rutgers University.
- 矢作弘 (1989) 『町並み保存運動 in U.S.A.』, 京都: 学芸出版.
- Zerubavel, Eviatar (2003) *Time Maps: Collective Memory and the Social Shape of the Past*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Zuzanek, Jiri, et al. (1996) *Heritage Preservation: Tradition and Diversity--An Annotated Bibliography*. Waterloo, Ontario, Canada: Otium Publications.

## 付記

本稿は、法政大学在外研究（2004-2005 年度）、日本経済研究奨励財団奨励金（2004 年度）、法政大学特別研究助成金（2006 年度）および法政大学大学院エコ地域デザイン研究所研究員としての研究成果の一部である。また、在外研究中、惜しめない研究基盤と協力を提供されたハーヴァード大学ライシャワー研究所および講演する機会を提供されたニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校社会学部に、特記して感謝したい。